

The Strategic Manager

戦略経営者 11

No.301
2011/NOVEMBER

一点突破

商圏・客層・商品を絞り込む経営

●第2特集

災害に備える!!
中小企業の事業継続計画

●戦経Interview

大手ホテルチェーン歌舞伎町店支配人 三輪康子
顧客の心に寄り添う気持ちが
クレーム対応を成功に導く

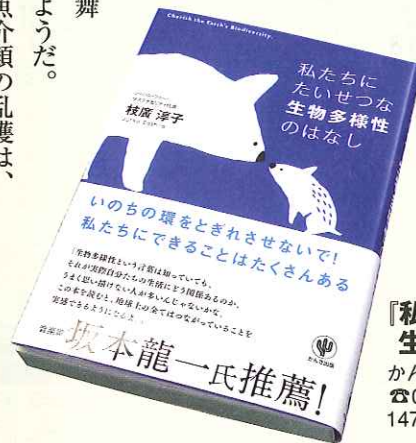
「持続可能社会」に欠かせない視点

「生物多様性」——近ごろよく目にする言葉だが、もう一つぴんとこないという方も多いはず。「シロクマが絶滅しても人間にはそれほど影響しないのでは」とたかをくくる向きもあるかもしれない。本書の著者・枝廣淳子さんに説明してもらおう。

劇ですが、日本でもこれと同じことが行われています。たとえば、明治初期に4000種類あった稲の種類は現在では88種。しかも全収穫量の3分の2はわずか4種で占められています。決して対岸の火事ではない」

(枝廣さん)

近年、種の絶滅はなんと通常の1000倍のスピードで進んでいるという。この数字だけでも人間の傍若無人の振る舞いがいかい見えるようだ。とくに森林伐採や魚介類の乱獲は、再生可能な資源である生物種を次々と再生不可能な種に追いやっていく。このままでは、生態系の精密かつ微妙な連鎖はズタズタに途切れてしまうことは確実だろう。



『私たちにたいせつな生物多様性のはなし』

かんき出版
☎03-3262-8012
1470円



ジャパン・フォー・サステナビリティ代表
枝廣淳子

環境省の「エコアクション21」(中小企業版環境ISO)の導入支援活動で、全国500社以上を回った経験もある枝廣さんはこういう。

「まずは、無駄の排除。いわゆる紙・ゴミ・電気の見直しですね。それから技術革新(生産性の劇的向上)。必要とされるものだけをつくる。ビジネスモデルへの転換も求められます。さらに、何よりも大事なものは経営者の「先を見る目」でしょう」

生物多様性については欧米を中心にさまざまな法規制がつけられつつあるし、将来的には日本にも波及してくるのは確実。その流れを読んで対応すれば最低限リスク回避ができる。また、周辺に生まれるであろうビジネスチャンスをつかみとることも可能だ。

「世界的に見れば、温暖化防止と同じく、生物多様性の保護も社会の要請になりつつある」という枝廣さん。中小企業といえども、自社が環境に及ぼす負荷を認識し、本気でそれを減らす努力をすることが企業としての評価を上げ、ひいてはそれが生き残りの必須条件となる時代がやってきたのかもしれない。

19世紀のアイルランド。農民たちが収穫量を上げるため生産効率の良い1種類のジャガイモだけを栽培するようになった。ところが、その種のジャガイモに伝染するウイルスが入ってきて、全滅。100万人が命を落としたという。

「生物多様性の意義を軽視し、短期的な経済効率を追求するがゆえに起こった悲劇ですが、日本でもこれと同じことが行われています。たとえば、明治初期に4000種類あった稲の種類は現在では88種。しかも全収穫量の3分の2はわずか4種で占められています。決して対岸の火事ではない」

「生物多様性」という時代の流れ

●枝廣淳子(えだひろ・じゆんこ)

環境ジャーナリスト、翻訳家。東京大学大学院教育心理学専攻修士課程修了。「持続可能性」に関する日本の情報を世界に発信するNGOジャパン・フォー・サステナビリティ代表。地球環境の現状や世界・日本各地の新しい動き、環境問題に関する考え方や知見を環境メールニュースで広く提供している。